

上トラキアの青銅器時代集落を掘る

—ブルガリア、デヤドヴォ遺跡の調査—

千本 真生 古代オリエント博物館研究員

Excavating a Bronze Age Settlement in Upper Thrace: Archaeological Investigations of Dyadovo in Bulgaria

SEMMOTO, Masao Associate Curator, The Ancient Orient Museum, Tokyo

1. はじめに

今日、ブルガリアが占めている地域にはトラキア人と呼ばれる古代民族が暮らしていた。この集団が歴史の舞台で活躍した時期は前1千年紀後半とされているが、トラキア人の起源についてはよくわかっていない。一つの仮説として青銅器時代に遡る可能性が指摘されている。しかし、仮説を検証するためには総合的かつ包括的なアプローチが必須であり、その一環として具体的な考古学的証拠を積み上げていくことが求められていた。そこで東海大学を中心とする日本調査隊が、デヤドヴォ (Dyadovo) 遺跡の発掘調査に1984年から

参画することになった。当時まだ詳らかにされていないブルガリア青銅器時代の物質文化を明らかにするために、まず基礎資料を収集すること、そして当該期の編年や物質文化の特徴とその形成過程を明らかにすることが調査の主な目的となった(図1)。デヤドヴォ遺跡で最後に発掘調査が行われた2012年からすでに10年が経過しようとしているが、今回デヤドヴォ遺跡でこれまでに行われた調査の成果を整理し、紹介してみたい。

2. デヤドヴォ遺跡の概要

デヤドヴォ遺跡はブルガリア南部にひろがる上トラ

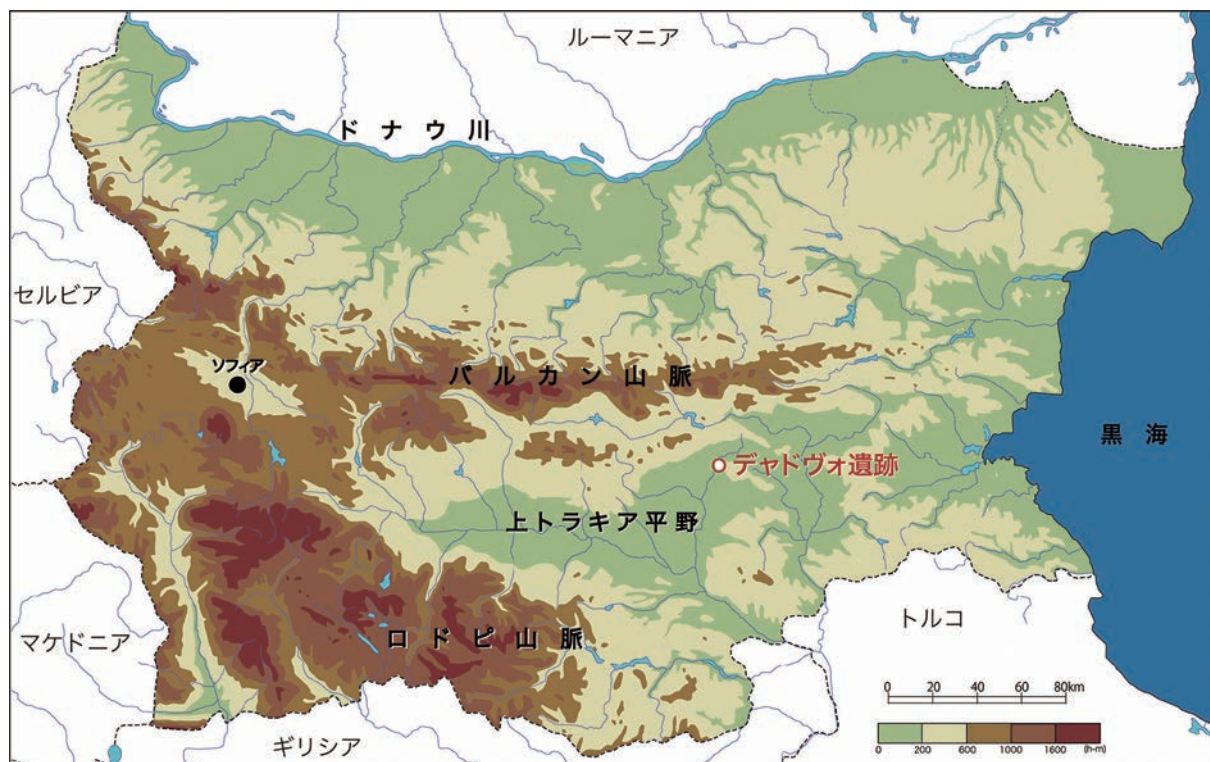


図1 ブルガリアの地形図とデヤドヴォ遺跡の位置

キア平野に位置するテル型の集落遺跡である。先史遺跡の規模としてはブルガリアで最大級のテルの一つに数えられる。高さは最大で18mを測り、東西220m、南北140mの楕円形をしている(図2)。日本隊による発掘調査は1984年から2012年にかけて中断を挟みながら23シーズンにわたって行われ、その後2020年3月まで現地で出土資料の調査が進められた。



図2 デャドヴォ遺跡の全景(南西より)

デャドヴォ遺跡では1970年代の終わりに遺跡北部に設置された試掘坑での調査によって、中世(11~12世紀)、古代(4~6世紀)、青銅器時代、後期銅石器時代の文化層が4m以上堆積していることが分かっていた。日本隊が調査に参加する前から、ブルガリア隊とオランダ隊が中世の集落と墓域、そして古代の城壁を対象にテル頂部のほぼ全域で発掘をしていた。日本隊は比較的平坦な遺跡の中央部に調査区を設け、青銅器時代層の調査に着手した(図3)。中央調査区(約350m²)の調査では、青銅器時代編年と集落における物質文化の実態を把握することに努めた。それから居住域を囲う施設の年代、規模、構造を明らかにするために、遺跡東部の斜面部に一箇所、北部にも二箇所、調査区を設置している。

3. 中央区の調査

日本隊は1984年から中央調査区(J~N/23~25区)で青銅器時代層を調査し始め、1990年代に中央セクションベルト沿いに設けた試掘坑とトレンチの区画で

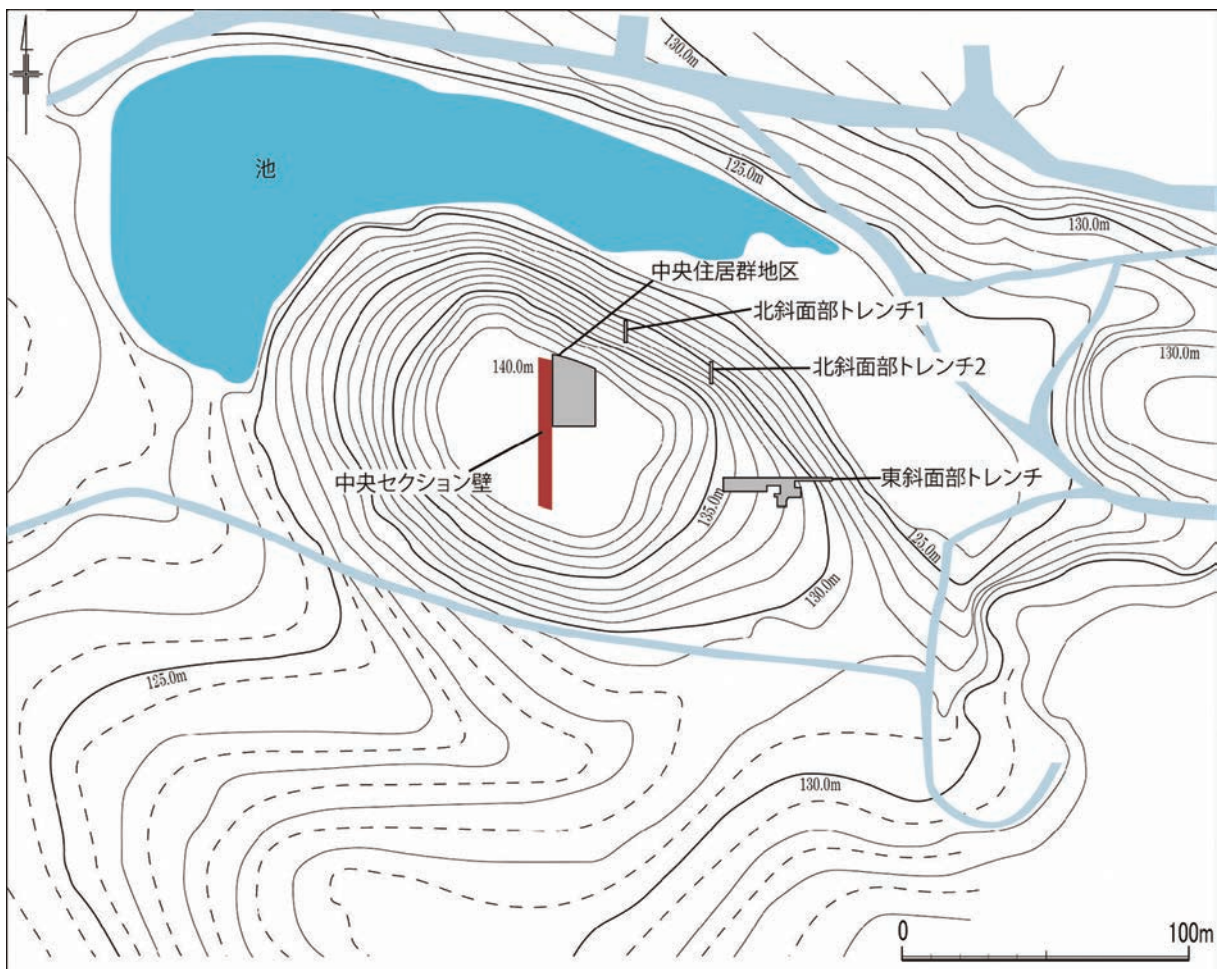


図3 デャドヴォ遺跡における調査区



図4 中央セクション壁の文化層堆積

後期銅石器時代層の上部に達している(図4)。調査当初から青銅器時代層の上部は中世の活動によりかなり攪乱されていることが分かっていたが、それでもデヤドヴォ遺跡で確認された青銅器時代層の厚さは3mに及ぶことが明らかになった。当該層の資料はすべて前期青銅器時代に属することが、出土した遺物の特徴と後述する放射性炭素年代から判明した。層位観察の結果、前期青銅器時代層は住居址に関連する生活面に基づいてすくなくとも20層に区分することができた。また、その下層の後期銅石器時代層とのあいだには厚さ40cmほどの、いわゆる「漸移層」が確認され、二つの時代のあいだには層位的な断絶があることが分かった。

層位観察に基づく所見は、前期青銅器時代層と後期銅石器時代層から採取した計61点の炭化資料の年代測定によって裏付けられた。それによると、後期銅石器時代層の年代は前5千年紀第3四半期(2σ)に位置づけられ、前期青銅器時代層の資料は前3200~2400年の範囲におさまったことから、両時代のあいだには約1千年の年代差があることも実証された。一方、前期青銅器時代層最上部の資料は放射性炭素年代が測定されていないため、下限については留意が必要である。さらに、前2700/2600~2500年のあいだには、100~200年ほどの年代上の間隙が認められた。

中央区では前期青銅器時代層から26枚の住居址の床面が記録されている。住居址の保存状況は粗悪で確認された床の厚さは1cmにも満たない。床面を囲うようにして方形状に配置された径7~10cmの柱穴列とその周辺から検出された黄色粘土が、住居の壁の残りとして認められた。これまでに確認された住居址は



図5 デヤドヴォ遺跡の前期青銅器時代住居址



図6 デヤドヴォ遺跡第IV層の溝

地上式で、幅4~5m、長さはおそらく7~8mを測る長方形プランを呈する(図5)。壁の部材には材木、粗朶、粘土が用いられており、上トラキア平野の先史時代に典型的な住居址の特徴を備えている。デヤドヴォ遺跡の住居址は北北東と南南西を長軸にして建てられ、3~4基以上の住居が隣接しあいながら配置されていたと考えられる。

デヤドヴォ遺跡の中央区では住居址のほかに、カマド、炉、ピトス、幼児埋葬などが検出された。カマドや炉は約250基調査されていて、そのほとんどが径50~200cmの円形プランをしている。同じく円形のピトスからは炭化したコムギやレンズマメの種子が見つまっている。デヤドヴォ遺跡で検出された埋葬址はわずかに1基であるため、墓域は集落の外に位置している可能性が高い。

1基の溝が前3千年紀なかばに年代づけられる第IV層から、調査区を東西方向に横断するようにして検出されている。断面はV字状を呈しており、上端部の幅は185cm、深さは130cmを測る(図6)。溝は

比較的短期間で埋められたようだが、下層の第Ⅴ層とのあいだに時間的な断絶がある。溝の新設とそれに伴うそれまでの住居配置パターンの変化を通じて、第Ⅴ層と第Ⅳ層とのあいだに集落構造上の一つの画期をみてとることができる。

4. 斜面部の調査(2006～2011年)

前期青銅器時代の集落を囲う構造物の存否を確認するために、テルの斜面部と周辺で地中探査を実施した。その結果に基づいて東斜面に調査区を設置し、発掘調査を行った。上層の中世層から住居址や墓址などが発見された。その下層からは前期青銅器時代と後期銅石器時代の溝が1基ずつ重複して検出された。前期青銅器時代の溝は放射性炭素年代によると前3000～2900年ごろに年代づけられた。幅120cm、深さ70cm程度で規模は小さく、柵列や土塁といった付属施設は見つかっていない。溝の範囲を探るために北斜面にも2011年に二ヶ所トレンチを設置したものの、そこでは溝は見つからなかった。このことから、溝はテル全域を囲うようにして地面に掘り込まれたのではなく、傾斜が比較的緩やかな東斜面部のみ居住域を外界と隔てるために設置されたと考えられる。

5. 出土資料の調査

デヤドヴォ遺跡の前期青銅器時代層からは土器のほかに、素材の異なる利器・道具類、そして装飾品や小物が出土している(図7)。これまで出土遺物の型式学的な分類を進めながら、素材の分析も行ってきた。土器については胎土に花崗岩質の粗粒粒子が多く含まれることが明らかになったため、遺跡から東へ約7km離れたところに位置する花崗岩地帯から産出される素材が地元の土器製作に利用されたのだろう。一方、カマドや住居の床や壁の部材には遺跡の基盤層をなす粘質土が使われた。打製石器はおもにフリント製であり、その産地がブルガリア北東部と北部にあることも明らかになった。磨製石器のうち石皿と磨石には砂岩が、石斧には緑色凝灰岩がおもに用いられた。金属器については成分分析を実施したところ、銅製とヒ素を含む銅製であることが明らかになっている。土器や建材は地元で採取可能なものが利用されていたのに対し、それ以外の遺物は地元で採取することが難しい素材が利用されていたことから、他の集落や地域との交流を通



図7 デヤドヴォ遺跡出土の凸帯文深鉢

じてそうした製品の多くが得られたのではないだろうか。

6. おわりに

デヤドヴォ遺跡では長期にわたって前期青銅器時代集落址の調査が行われてきた。一連の調査を通じて、ようやく上トラキア平野における前期青銅器時代のより高い精度の編年的枠組みを構築することが可能になり、それに基づいた集落における生活様式、物質文化や集落ないしは地域間の交流関係の実態解明に迫ることができるようになってきた。今後は現地調査を継続して行い、調査報告書を作成するために資料の情報を収集、整理していくことが課題となる。

ディアナ・ゲルゴヴァ氏、タティアナ・カンチュヴァールセヴァ氏、田尾誠敏氏、柴田徹氏にはデヤドヴォ遺跡の資料調査において多大な支援を頂いている。本研究の一部は日本学術振興会科学研究費・若手研究(B)と若手研究(研究代表者：千本真生、課題番号16K21589・19K13399)の助成を受けて実施した。

参考文献

- ・Semmoto, M. 2021 Early Bronze Age chronology and settlement at Dyadovo in the Upper Thracian Plain. In K. Leshtakov and M. Andonova (eds.), *Galabovo in South-east Europe and Beyond. Cultural Interactions during the 3rd-2nd Millennium BC*, 98-113. Sofia, Ars and Technica explicates Ltd.
- ・禿 仁志 2004『デヤドヴォ発掘』東海大学。
- ・禿 仁志(編)2014『ブルガリア・デヤドヴォ遺跡の資料分析を通して見る青銅器時代開始期の背景』東海大学トラキア発掘調査団。